

教育委員会会議の議事録（平成30年7月臨時会）

◆ 日 時 平成30年7月10日（火）午後2時から午後5時35分まで

◆ 場 所 本庁舎 第1委員会室

◆ 出 席 者

教 育 長	佐 々 木 洋	出席
委員・教育長職務代理者	吉 田 利 弘	出席
委 員	齋 藤 道 子	出席
委 員	加 藤 道 代	出席
委 員	花 輪 公 雄	出席
委 員	中 村 尚 子	出席
委 員	里 村 正 治	出席

◆ 会議の概要

1 開 会 午後2時

2 議事録署名委員の指名 加 藤 委 員

3 協 議 事 項

（1）平成31年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書の採択について

（教育指導課長、教育センター担当指導主事 説明）

教育指導課長 今年度は、平成31年度に使用する中学校用教科書、小学校用教科書、特別支援学校・特別支援学級で使用する一般図書の採択を行うこととなるが、本日を含む3回の協議において、これら教科用図書のうち「中学校 特別の教科 道徳」の教科書、小学校用教科書、特別支援学校・学級用一般図書についてご審議いただき、7月27日の定例教育委員会でそれぞれの採択をお願いしたいと考えている。

それでは、本日ご審議いただく「中学校 特別の教科 道徳」の教科書についてご説明する。

平成30年度においては、平成31年度に使用する中学校用教科書について、新た

に「特別の教科 道徳」の教科書を採択する。それ以外の教科書については平成 29 年度と同一の教科書を採択しなければならないこととなっている。

なお、去る 6 月 27 日に、平成 30 年度仙台市立義務教育諸学校教科用図書協議会から、採択対象となる「中学校 特別の教科 道徳」の教科用図書について、教育委員会に対して報告が行われた。審議に当たり、協議会の報告書や調査研究委員会報告書などの内容も参考にさせていただきようお願いします。

教 育 長

本日は、今年度の採択対象となる「中学校 特別の教科 道徳」の教科書について協議を行う。協議の適正さ、公正さを確保する観点から、委員の皆様には自由で率直な意見を述べていただくため、本日の協議では具体的な発行者名をお手元の対応表に従い、発行者名ではなく A 者、B 者と呼ぶようにしたいと思う。なお、A、B は任意に記号を振ったものであり、発行者番号順ではないのでご了承願う。

したがって、本日使用する資料のうち、発行者名が記載されている別紙資料 1 から 7 については、採択手続終了まで非公開としている。そこで、傍聴においでの皆様へは別紙資料を配付しないこととしている。8 月 31 日以降に、議事録と併せて当該資料を市政情報センターにおいて閲覧できるようにするので、ご了承願う。

それでは、改めて事務局から配付資料について説明願う。

教育指導課長

資料 1 は、宮城県教育委員会から示された「教科書の採択に係る基本方針」である。

資料 2 は、同じく宮城県教育委員会から示された「平成 31 年度使用教科用図書採択基準【中学校 特別の教科 道徳】」である。これは県内各採択地区において、適切な採択を確保するための援助として、宮城県教育委員会が作成したものである。

資料 3 は、6 月の臨時教育委員会で議決いただいた「平成 31 年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書の採択方針」である。「中学校 特別の教科 道徳」に関しては採択の観点が（1）から（14）の 14 観点となっている。

資料 4 は、「中学校 特別の教科 道徳教科書見本本発行者一覧」である。

続いて、別紙資料についてご説明する。

別紙資料 1 は、「平成 31 年度仙台市立義務教育諸学校で使用する教科用図書の採択対象となる教科用図書について（報告）【中学校 特別の教科 道徳】」である。本資料は、有識者、保護者代表、校長から構成された仙台市立義務教育諸学校教科用図書協議会で、中学校で使用する「特別の教科 道徳」の教科書の特長をまとめたものである。教科書目録の発行者掲載順に記載している。協議会において、多面的・多角的な分析をいただき、「中学校 特別の教科 道徳」の教科書見本本について、有識者の方々からは、例えば「命の大切さやいじめ防止について重点的に扱われるような工夫がなされている」「生徒の主體的な取り組みを促す工夫や自己の生き方についての考えを深められる構成になっている」などのご意見を頂戴するとともに、保護者の方々からは、例えば「いじめ防止や情報モラルなどの今日的課題を重視していて、子どもにとって身近な生活事例から考えることができる内容になっている」「イラストや写真などの活用により、子どもの発達の段階や興味関心に配慮したものになっている」などの意見を頂戴した。

別紙資料 2 は、「平成 31 年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書にかかわる資料 1【中学校 特別の教科 道徳】」である。本資料は、市立学校校長及び教頭で構成された調査研究委員が道徳の見本本の調査研究を行い、道徳科の目標と

仙台市の採択の観点に沿って各教科書見本本の特長を示した報告書である。

別紙資料3は、「平成31年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書にかかわる資料2【中学校 特別の教科 道徳】」である。本資料は、中学校の教諭で構成された専門委員が道徳の見本本の調査研究を行い、報告書1と2の構成でまとめている。報告書1は、県の採択基準に沿った仙台市の採択の観点に基づく調査研究、報告書2は、学習指導要領に沿った仙台市の採択の観点に基づく調査研究となっており、各教科書見本本の特長を観点に沿って網羅的に示した報告書である。

別紙資料4は、平成30年度仙台市立義務教育諸学校教科用図書協議会(中学校)議事録である。

別紙資料5は、宮城県教育委員会から示された「平成31年度使用教科用図書採択選定資料中学校用(特別の教科 道徳)」である。資料1の宮城県教育委員会の採択基準の4つのカテゴリについて、「特別の教科 道徳」の教科書見本本の全発行者の特長をまとめたものである。

別紙資料6は、宮城県教育委員会から示された「平成31年度使用教科用図書(中学校)選定資料 特別の教科 道徳(別冊)」である。この別冊は、各発行者の特長を一層明確にするため、記載の内容とともに、教材数やページ数など記載された分量を比較できるように作成されたものである。

別紙資料7は、平成30年4月に文部科学省から示された「中学校用教科書目録(平成31年度使用)」である。

配付資料は以上だが、加えて、参考資料として「平成30年度教科書展示会市民アンケート」「平成31年度使用教科用図書(中学校 特別の教科 道徳)の採択希望に関する資料」及び「要望書」がある。さらに「特別の教科 道徳」教科書見本本と編修趣意書も机上に用意しているので、併せてご参照いただきたい。

教 育 長 ただいまの事務局の説明について、何かご質問はあるか。

(質問なし)

教 育 長 協議の進め方については、事務局から学習指導要領における「特別の教科 道徳」の目標等について説明を受けた後に協議を行うこととしたい。道徳の教科書については、事前に事務局が届け、本日までに実際に教科書見本本をご覧いただいているものと思う。また、報告書等の各種資料にも既に目を通していただいていることから、この場では閲覧の時間は設定せず、協議に十分な時間をとるようにしたいと考えている。

協議については、初めに各委員から仙台市の採択方針の観点(1)から(14)を踏まえて、協議会報告書や調査研究委員会報告書等を参考にしながら、全ての発行者の特長についてコメントをしていただきたい。各委員から一通りご意見をいただいたところで、2者ないし3者程度の教科書見本本について理由を付してご推薦いただき、それらの意見を踏まえて複数者に絞り込み、再度、仙台市の採択の観点に沿ってコメントをいただき、さらに絞り込みといった議論を進め、全員の合意のもと1者に絞り込みたいと考えている。

本日の議論を踏まえ、27日の定例教育委員会で確認の上、採決に係る議決を行いたいと思う。以上の進め方について、これに異議はないか。

(異議なし)

教 育 長 これからこのような進め方で協議を行いたいと思う。長時間の審議となるが、皆さん、よろしく願います。

【中学校 特別の教科 道徳】

教 育 長 「中学校 特別の教科 道徳」について協議を行う。

事務局から学習指導要領の目標等について説明をお願いします。

教育指導課長 道徳担当指導主事よりご説明申し上げます。

道徳担当指導主事

「中学校 特別の教科 道徳」では、中学校学習指導要領第1章総則の第1の2に示す「道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本的精神に則り、人間としての生き方を考え、主体的な判断の基に行動し、自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」に基づき、基盤となる道徳性を養うため、生徒が道徳的諸価値についての理解を基に自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、信条、実践意欲と態度を育てることを目標としている。

道徳教育は、昭和33年の学習指導要領において、小中学校に各学年週1単位時間の道徳の時間が設置されて以降は、この道徳の時間を学校における道徳教育の要として、学校教育全体を通じて生徒の道徳性を養うこととしてきた。

これまで学校や児童生徒の実態などに基づき、道徳教育の重点目標を設定し、充実した指導を重ね、成果を上げる一方、例えば他教科等に比べて軽んじられていること、読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われる例があることなどの課題が指摘されてきた。

このような状況を踏まえ、道徳教育の充実を図るため、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育と、そのかなめとしての道徳の時間の役割を明確にした上で、生徒の道徳性を養うために適切な教材を用いて確実に指導を行い、指導の結果を明らかにしてその質的な向上を図ることができるよう、平成27年3月に学校教育法施行規則及び学習指導要領の一部を改正し、道徳の時間を教育課程上「特別の教科 道徳」以下、道徳科として新たに位置付け、その目標、内容、教材や評価、指導体制の在り方等の見直しが図られた。

道徳科の授業では、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う「考え、議論する道徳」への転換を図ることが求められている。内容については、いじめ問題への対応や生命を尊重する精神を育むこと、他者を思いやり相手を受け入れる心を育てることなどの指導内容の重点化が挙げられている。

また、内容の指導に当たっては、生徒の発達の段階等を考慮し、興味や問題意識を持つことができるような身近な社会的課題を取り上げること。人間としての弱さを認めながら、それを乗り越えてよりよく生きようとする。さまざまな価値観について、多面的・多角的な視点から振り返って考える機会を設けるとともに、生徒が多様な見方や考え方に接しながら、さらに新しい見方や考え方を生み

出していくことができるようにすることに配慮することが示されている。
教 育 長 事務局の説明について質問等はあるか。

(質問なし)

教 育 長 委員の皆様には既に見本本に目を通していただいていることから、各発行者の順にご意見をいただきたいと思う。

齋 藤 委 員 8者とも中学校学習指導要領の22項目が実に満遍なく細やかに生かされていることに驚いた。読みやすい、見やすい書体や学習に集中しやすい特別な支援への対応など、ユニバーサルデザインに十分な配慮がされている。

全て素晴らしい教科書の中で、特にこの部分がよいと思ったところをお話しさせていただく。

A者は、「いのちの教育」と「いじめ防止」を重点に、多面的・多角的に考え、議論できるよう大変工夫されている。また、「様々なテーマで学ぼう」で各テーマを示すことにより、さらに深く考え、議論しやすく組み込まれていると思う。

教科書のサイズが大きく、写真や挿絵が多く、配置や表現が適切であり、余白が十分あるためゆとりを感じる。

ユニット教材を導入することで学びを深めることができる。また、本文とは別に、考えを深めるための「クローズアップ」や「クローズアッププラス」の資料が多く、大変充実している。他教科との関連性も配慮がなされている。

B者は、生命尊重への学びを深めながら、いじめを許さない心を育てる観点を貫いている。

「考え、話し合ってみよう。そして深めよう」では、生徒の思考を揺さぶる問いを出し、生徒が自然に考えを出すことへと導いている。伝統や文化を重んじ、自然や景観を敬う精神は、心の育成に効果的である。考えを深めるための設問、自分を見つめる設問、議論を促す設問等が多く、生徒が自己の生き方について考えを深め、自分自身の課題として多面的・多角的に捉え、解決していける力を身につけるための工夫がなされている。

C者は、「命を尊ぶ心」や、「自分の弱さを克服する強い心」などの教材が複数配置され、繰り返しの学習により自己の個性・能力・適性を深く見つめるための工夫がなされている。学校行事や地域活動等の話題を積極的に取り入れ、生徒の生活や地域の学習につなげることができるよう配慮されている。生命の尊厳とともに、LGBT、セクシュアルマイノリティを題材に、自分らしい多様な生き方を考える教材が配置されていることも重要である。

「心の扉」を本文と併せて設けることで、学んだことをさらに自分自身の物の見方や考え方として深め、主体的な学びができるよう配慮がなされている。「学びに向かうために」と「学びの記録」が連動していて、気持ちのまとめができ、また、後に自分自身の振り返りにもつなぐことができるところがよい。

D者は、図表やレイアウトのバランスがよいと思う。3年を通して「自分を見つめる」「自分を考える」「自分をのばす」と、各学年にテーマを持ち、人間の素晴らしさや前向きに生きる力に関することが主として取り上げられている。

分冊では、本編とは別の素材を扱っており、深める、広める工夫がなされている。

その分冊、「道徳ノート」では、内容項目別に構成され、学習を行う上での方法や導きに役立ち、また繰り返しや考えをまとめる活動に活用できることと、提出が容易なので、生徒の学習状況を教師が確認できる点が良い。生命の尊さ、思いやり、よりよく生きる喜びに重点を置き、生徒は「道徳ノート」を記入することで心の記録となるようによく工夫されている。「考える・話し合う」により、生徒の主体的な考え、対話的な深い学びを促すよう工夫されている。

E者は、教材ごとに「学びのテーマ」「考える観点」「見方を変えて」「つなげよう」「私の気づき」のコーナーがあり、主体的・対話的な学びを深めている。最終ページに「学びの記録」を設け、感じたことや考えたことを書くことで、他者との対話により得た思いや、自分自身の心の動きを実感できるようよく工夫されている。また、これを見ることで、教師も生徒の心の成長を読み取ることができる点が良い。

「コラム」により、いじめ問題、情報モラル、共生、社会参画、環境、国際理解、人と人との関係づくりという現代的な課題への対応を示し、直前の教材と関連付けて活用でき、道徳的な判断力や心情、実践意欲と態度を育むことができる。また、小学校の定番教材を学び直しとして収録し、中学生に成長した今の考えを改めて語り合うことで深い学びにつなげているところが興味深い。

F者は、いじめ防止を最重要テーマに位置付け、いじめ問題に正面から向き合った教材から、多面的・多角的な視点で対話的な学びが展開できるように工夫されている。「この教科書で学ぶテーマ」として、道徳科でより広く深く考え合うための導入ができています。

「考えてみよう」と「自分にプラスワン」を分冊「道徳ノート」につなげることで、自分の考えをまとめたり、友達の意見を聞いて他者の考えを知ったり、そこから自分自身の振り返りができることがよいと思う。また、生徒は、「道徳ノート」を読み返すことによって、生き方や心の成長を実感していくことができる点と併せて、生徒の心の動きを教師も確認しやすい点が良いと思う。書くことが苦手な生徒でも、「自分への振り返り」に丸印を付ける箇所があるため、自らの考えの深まりについて知ることができるよう配慮されている。

「プラットフォーム」や「参考」という大きな2つのコラムにより、学習した内容をさらに視野を広げたり、理解を深めたりする手立てとなっている。

G者は、A4サイズの教科書は扱いやすい大きさだと思った。それから教科書の行番号の表示に点打ちが施され、授業の進行や生徒が読み進む際の配慮がなされている。各教材の最初のタイトル下にレ点の導入部分があり、末尾には同じレ点で「学びの道しるべ」としてつないでいる。この「導入」と「学びの道しるべ」を設けることで、意識付けと価値への方向付けを図りながら、学習前後の心の変化を自分で実感できるように配慮されている点が良いと思う。

学校行事や地域行事など、生徒の生活実態に合った教材が多く掲載されているので、日々の体験を基に話し合うことができる。また、答えが一つではない課題に向き合うことで、生徒同士が互いの考えを多面的・多角的に確かめ合えるような工夫が十分なされている。

H者は、「いじめ問題対応ユニット」と「生命尊重ユニット」が設定され、尊い命を大切にし、互いを思いやり、共生の心を育み、人間としての生き方を深く考え

られるよう配慮されている。教材の導入として、タイトルに関して、生徒への投げ掛け表現を示したり、内容に関連する漫画の一部を掲載することも、生徒が学習する内容をイメージしやすい一つの手法であると思う。

教材中の「つぶやき」は、思ったことや感じたことを自由に書き込むことで、主体的に学習へ取り組み、そして「考えてみよう」や「ACTION!」で、互いに考え、議論し合う学習が展開できるよう、よく構成されている。

巻末にある「自分の学びをふり返ろう」により、自身の心の育ちの足跡が残り、教師にとっては生徒の心の動きが確認できるフォーマットとなるであろう。

文節での改行を行っているので、読み間違いが起りにくいと思う。また、「テーマでふり返ろう」で、現代的な課題や取り組みを分類したり、「探求の対話、P4C」を取り入れているところが興味深い。「ホワイトボード用紙」や「心情円」の授業支援ツールにより、話し合い活動や思考の質を高めることができると思う。

花 輪 委 員 8者について述べたいと思う。

総論として、35時間分の授業をやるということで、8者ともおおむね35の教材を工夫して配列している。それぞれの者で3分の1程度は同じような教材が選ばれているが、その者の多くが優れた教材を並べているように思う。また、単に教材を与えるばかりではなく、教科書作成者側の意図を考えてほしいということで、学びのポイント等を示すなど工夫が見られる。また、自らを振り返ることや、他者との話し合いによって考えを深める工夫をしている。さらには、文章を書くことによって理解を深めたり、考えをまとめたりする工夫もなされている。8者ともいずれもいい教科書である。

1者ごとにコメントをしていく中で数字を言うが、これは主に3年生の教科書で数えた数字である。ただ、1年生から全部見たが、全て同じような内容なので、少し変わっている数字もあるが、ご了解いただきたい。

A者は、大型の版で184ページ、分量としては全8者中、中程度である。「自己を見つめる」「他者との関わり」、それから「集団社会との関わり」「自然や崇高なものとの関わり」ということで4つの観点が設けられているが、それぞれ8・8・12・7ということで、かなりバランスのとれた内容となっている。

この者は、生命尊重といじめ防止に重点を置いて教材を選んでいる。各教材の後ろに、さらに深く考えるための「クローズアップ」や「深めよう」を配置して深く考える工夫がなされている。巻頭にガイダンスのために、考えを深める4つのポイント、目次、よりよく生きるための22の鍵、さまざまなテーマで学ぼうというものがあり、生徒がポイントをつかみやすい構成にしている。教材では、漫画も取り上げられており、幅広く取り扱っているという印象である。中でもいじめは、ほかの教科書の中でも最も多くの教材で取り扱っているのではないかと思う。

この者はユニバーサルデザインフォントを採用していて、本当に読みやすい。

B者は、大型の版で192ページ、中程度の分量であった。AからDまで6教材、7教材、15教材、7教材ということで、Cの「集団あるいは社会との関わり」に重点を置いている特長がある。いじめは、生命尊重の中で取り扱われている。配列が非常にユニークで、学習指導要領の順序に並んでいる唯一の者だが、これはいい悪いの問題ではない。教師あるいは学校での工夫に委ねているとも考えられる。

教材のほかにコラムがあり、教材のテーマをさらに深めるのに役立っていると思

う。各教材の後ろには課題が2ないし3つ示されており、自分で考えたり、あるいは他者と議論したりするきっかけをつくっている。教材そのものは独自の題材が多いように感じた。非常に意欲的に教科書づくりをした表れだと思う。LGBTについても触れており、現代的・今日的課題も取り扱っている。

C者は、中型の版で224ページある。かなり多いほうだと思う。特にB者と同じように、Cの「集団あるいは社会との関わり」に重点を置き、15教材という非常に多い教材を扱っている。

各教材にはいじめ防止などのポイントマークを付してねらいを明確にする工夫をしている。ほとんどの教材の後ろには「心の扉」が設けられており、自分を振り返る工夫をしている。さらに、記述を求めているので、自分の考えをまとめる工夫もなされている。教材の末尾には、学びに向かうためのということで、「考えよう」「意見交換しよう」「見つめよう」という設問がなされており、書き込むスペースもある。いじめ防止と生命尊重を扱う教材がきちんと配置されているのが特長である。

また、この者の教科書もユニバーサルデザインフォントが使用されていて大変読みやすいという印象を受けた。

D者は、2分冊を用意していて、テキストとノートから成っている。合計210ページとやや多い。AからDまでの内容はほぼ均等というか、A、B、Dが7教材ないし8教材、Cが12教材ということでバランスをとった配置となっている。

分冊の道徳ノートは、テキストの内容と連動するものではなく、道徳的思考あるいは価値観について自学自習できるよう工夫されており、特に記述を求めている。次に、各教材の末尾には、「考える」「話し合う」として学習の手掛かりとなるように工夫されている。

また、この者は、各教材の後ろに、歴史上の著名人の短いながらも含蓄ある言葉が紹介されていることに感心した。

E者は、大型の版で、232ページ、分量としては一番多い。「自分をみつめよう」という教材を9つ取り上げていて、一番多い教材数である。いじめに関するテーマも多く扱われている。並べ方は、AからDまでランダムに並んでいるが、4つのシーズンと9つのユニットにカテゴライズしてまとめて配置されており、考えを深めるのに有効だと思う。

各教材の後ろには「学びのテーマ」と題する1～2ページの手引がある。「学びのテーマ」「考える視点」「見方を変えて」「つなげよう」、それから「私の気づき」という順序で教材を扱う形になっている。巻末には人生目標年表、これは3年生だが、学びの記録を記述させる工夫もしている。いじめについては非常に真正面に対応していて、3年生では7つの教材で取り扱っている。また、伝統文化に重きを置いているように思う。

F者は、2分冊になっている。本文のほうが、テキストが191ページ、ノートが40ページ、合わせると分量的には一番多い。この者はA・B・C・Dの教材の配置数割のバランスがとれている。いじめは2テーマで扱っていた。

教材はランダムに配置されているが、同じテーマを並べるなど、集中的に考える時間をとる工夫をしている。巻頭に内容、AからD、学び方、集団での議論、あるいはロールプレイなどを紹介していて、各教材のポイントがあらかじめ分かる工夫

をしている。各教材の末尾には「考えてみよう」と「自分にプラスワン」の2つの設問がある。回答はノートに記載する形で、さらに自分に対して、自分がどの程度理解しているかも含めて評価してみようという設問がある。

教科書は、全体的にととても読みやすい、非常に明るい感じがした。ユニバーサルデザイン、ユニバーサルフォントを使っている。

また内容に入るが、発達障害をテーマにした教材、1年、3年で一つずつあった。こういうテーマも現代的・今日的課題なので大変いいと思う。

G者は、小型の版で178ページ、分量としては8者の中ではコンパクトにまとめられている。AとB、「自分を見つめる」「他者との関わり」が5教材であり、「集団あるいは社会との関わり」が16、「自然あるいは崇高なものとの関わり」が9教材ということで、そういったところに特長がある。

各教材の末尾には「学びの道しるべ」というところがあり、2つないしは3つのポイントを明記して考えるポイントを生徒に与えている。例えば3年生は「旅立ち」のことなどを考えさせるということで、各学年に合った考えるべきことを配置しているのが特長である。また、教材の最初のところに、題名の下にその教材のテーマとなる設問があり、生徒にとっては次の教材はどういう観点から読むかについてあらかじめ分かるので読みやすいと思う。

この教科書は、ユニバーサルデザインフォントを使ったとは記されていないが、大変読みやすく工夫されている。

最後にH者である。これは中型の版で193ページ、中程度の分量だと思う。30教材と5つの補助教材ということで合計35教材だが、A・B・Dが七つ、Cが14ということで、これも均等に割り振られている。

いじめに関する教材は3年生では3教材だが、真正面から取り上げる工夫がされている。教材末尾に「考えてみよう」ということで、2ないし3つ程度の考えるポイントを明記している。また、教材の途中には「つぶやき」という自由記載欄があり、感想あるいはみんなで議論したいこと等を書かせる工夫がされている。巻末には、自分の学びを振り返るシートが3期配置されている。また、「ホワイトボード」の代わりとなる紙と「心情円」があるのが特長である。さらには、「ACTION!」ということで、役割演技を積極的に行うような教材を準備していることが特長である。またこの者は、本を紹介しているコーナーがある。いろいろな本を紹介していて、今余り本を読まないと言われていたが、望ましいやり方だと思う。

里 村 委 員

8教科書を概観した上での意見である。各者ともに、学習指導要領との関係をきちんと整理して、なおかつ現代的な課題への対応も織り込んだことで、しっかりした枠組みのもと教科書をつくっている。編集長の意見、編集方針等を読み比べながら実際の教科書を見ると、8者それぞれの教科書に対する考え方の違いも感じ取ることができた。

もう1点、各者ともにいじめ問題の取り組みに真剣に力を注いでいるのを感じ取ったが、教科書として完成させる方法や内容については必ずしも一致しているものでもなく、8者それぞれに特色があると感じた。

A者が非常にいいと思ったところは編集の基本方針がしっかりしているということで、特にプラス思考・未来志向を備えた生徒を育成しようという観点から教科書づくりに取り組んでいることである。えてしていじめの問題に取り組むと、マイ

ナス思考に陥りがちだが、このA者は非常に前向きに未来志向に持っていくという意図を感じさせる。

教材の内容にも素晴らしいものがあり、日本の各地域に関連した教材を掲載していることは非常によい。宮城県あるいは東北の話も随分載っている。A者の特長として、外国人の視点で日本の伝統文化が語られており、このアプローチもなかなかいいと思う。併せて長年使われてきた名作も多数扱われている。

あと「クローズアップ」という特設ページを設けており、編集方針に沿っていることだと思うが、自己肯定感の育成にも十分配慮がなされている。

A4のサイズで、写真や絵などの資料も多く配慮があると感じた。

B者の特長は、編集方針にも載っているが、「生き方は自由」ということを知ることがを目的にしている。基本の考え方に沿って一本筋が通った内容の教科書になっている。

いじめ防止は各学年に生命尊重といじめ問題を関連付けた12教材、56ページを設けてあり、いじめを許さない心の育成に非常に力を入れた教科書だと理解した。写真やイラストも他者より多く、自然の景観写真の豊富さは、題材にかかわらず、効果的に自然を敬う心の育成を図りたいという編者の気持ちが反映しているのだと思う。

C者の特長は、多様性を前提とした問題解決能力の育成であり、これも非常に大事なアプローチだと思う。他者と比べて内容・項目ごとに総ページ数が約40から50ページと多く、力を入れていることが感じ取れる。関係資料「心の扉」という説明は群を抜いて充実していると思う。より深く本文を理解するための工夫であり、充実した効果が期待できると思う。

直接的ないじめの問題だけではなく、未然防止につながるアプローチとして学校で起こりがちな事例を扱っている点も特長だと思う。また、大人の世界でよくあることだが、空気を読んで多数派に調子を合わせるということではなく、自他の違いを前提に多様な人々と協力し合うような力を育てるといふ、純粋な道徳的な学びを織り込む工夫がされている。

D者の特長は、別冊の「道徳ノート」が非常に充実していて、記入内容が生徒の心の記録となるように工夫されている。価値観の多様性をしっかり受け入れるという寛容な心を育むという点で、さまざまな観点から考えが深められる教材になっている。これは当者の説明、解説資料の冒頭に3人の教科書の編集代表による教科書編集に対する思いが熱く書かれており、その思いが教科書に十分反映されている。

D者についてはもう一つ、発展の段階を考慮して、年間の学びの中で、自分を見つめて考えて伸ばせる内容を精選した資料になっている点も特長だと思う。別冊のノートがついているのは8者のうち2者だが、その必要性や効果については皆さんの意見をよく聞きながら判断していきたい。

E者は、編集に当たって、教師が使いやすい教科書にしようということを強く意識した内容になっていると感じた。教師用資料として、ここが知りたいQ&Aといった丁寧な資料が作成されており、先生方は道徳の授業に当たっての理解を深めるのに大いに役立つと思う。

冒頭では、どう学ぶのかと、生徒が見えるような工夫があり、末尾ではなぜ学ぶのかが分かるような、そういうアプローチでの編集になっている。

それから、国際理解を異文化摩擦の視点で考えたり、あるいは過去の人々の価値観に目を向けることを通じて現代の生き方の視点を変えて問い直したりと、大きな方針の中で、国際、グローバルな人材という意味での新しいアプローチがある。

素材としての絵本や漫画形式の教材、新聞記事など、さまざまな資料やコラムにより課題が明示されており、生徒の意欲が高まることが期待される。全体的に内容も非常に優れていると思う。

F者の特長は、いじめと向き合うということに基本的な重点を置いた教科書になっていることである。いじめ問題に正面から向き合う教材が各学年に掲載されており、いじめについて主体的に考え、議論できるよう、さまざまな工夫がされている。いじめ問題について丁寧に対処するという一方で、命の大切さもさまざまな場面で考えられるように工夫されている。

別冊に道徳ノートがついており、自分の考えをしっかりと書き込んで発表につなげるということも期待できる。

G者は、編集の特長にも書かれてあるが、「考え、議論する道徳」の実現に向けて、先生と生徒がやってみたい、やれそうだという気持ち、取組みになるようなコンパクトでシンプルな教科書づくりになっている。編集の趣旨に沿った教科書ができ上がっている。随所により写真がたくさん配置されており、補助教材が5点ずつ配置されているのも内容の充実に資することだと思う。

初めのポイントにいじめをしない、させない、見逃さないと、やや直截的に明示されており、このアプローチがいじめをなくす、根絶するような教育につながることを期待したい。

H者のコンセプトが他者と違うところは、「中学生は忙しい」ということが初めにあり、「週に一度は立ちどまって今の自分を振り返る。少し呼吸を整える。これからの道徳がそんな時間になりますように」となっている。H者は、こここのところのアプローチが特長的ではないかと思う。

「考えてみよう」という問いが自分の考えを持つ問いとなっていて、対話的な教材の活用によって物事を多面的・多角的に捉え、自分の考えが深められるように構成されている。「つぶやき」のコーナーは、短い言葉で自分の考えをまとめられるように工夫されており、巻末には付録、「ホワイトボード」や「心情円」があり、言語活動の充実につながるような準備がされている。

写真はやや少ないが、漫画的な絵を描いた箇所が多いと思う。取り上げている内容は、分かりやすいものが多い。

中 村 委 員

8者ともとてもよくできていて、読みふけてしまうくらいよく考えられたものになっていた。各者、力を入れていただいたのがよく分かる。それぞれが特長ある教科書になっていて、生徒が学習していく上で自分自身をしっかりと見つめられるものになっていると思う。

A者は、生命尊重といじめ防止に関する教材が各学年に複数掲載されており、体験的な学習のページを設けて、さまざまな角度から考え、議論できるように工夫されている。日本各地域に関連した教材も多く、地域に合わせた指導の中で、郷土を思う心につながるように工夫されている。「クローズアップ」「クローズアッププラス」等の特設ページがあり、考えを深め、視野を広げられる工夫がされている。そして各学年の教材の内容が「よりよく生きるための22の鍵」として分かりやす

く示されており、学習のねらいが明確になっている。生徒に主体的に考えさせるように、主題名をあえて表示しない工夫がされている。各教材に関連する活動が学校行事等だが、適切な時期に設定されている配列になっている。

また、生きる上での選択肢を広げる「クローズアップ」「クローズアッププラス」の特設ページや、体験的な学習ができる「深めよう」などにより、生徒が主体的に学習できるよう工夫されている。初めに、自分を見つめるページがあり、そして最後に振り返りのページを設けて、自分自身の成長を見られるように配慮された形になっている。

文字がユニバーサルフォントで読みやすい工夫、そして写真やイラストが大きく、生徒がイメージを膨らませやすい形につくられている。

B者は、いじめ防止が各学年で生命尊重と関連付けられており、いじめを許さない心を学べるよう工夫されている。発達段階を踏まえたキャリア教育と関わる教材が配置され、自己理解、自己啓発、自己実現などをテーマとして上げている。

伝統文化や他国を尊重する心を育むように、歴史上の人物や各地の教材を多く取り上げられている。内容・項目ごとに配置されており、学習のねらいが明確になることで重点的に学習できるよう配慮されている。

巻末に学習指導要領対応表があり、内容やねらいが一覧表化されていることで分かりやすい。また、学習や指導の部分で「聞いてみよう」「話してみよう」「もっと知りたい」など、自主的な学習ができるよう配慮されている。結末が書かれていない教材を掲載し、自分自身の考えを引き出すような工夫がされている。

また、下段に注釈があり、読み進めていく上で支障がないように配慮されていることも挙げておく。

C者は、いじめ防止について、いじめを許さない直接的な教材と、いじめを起こさない間接的な教材が各学年に配置されている。郷土や日本の伝統文化を考える教材を通し、他国文化や交流を意識させる工夫がされている。命の尊さや生と死の意味を深く考えさせる教材が多数載っていた。

教材の最初に、主題と内容項目が文章とマークで示されており、学習の目標が明確になっている。学びの記録として、各教材で学習したことが一覧になっており、これまでの学習と自分自身の振り返りができる配列になっている。また、学習と指導の部分では、学びに向かうために授業に沿ったマークを付け、これらを活用して問題解決のための議論や体験活動的な学習ができるように工夫されている。「心の扉」は、教材と併せ、自分自身の考えや物の見方を深く考えることができるように配慮されている。

また、ユニバーサルデザインの観点からフォントや配色等が配慮されており、大切な10のポイントのマーク付けがあり、生徒が分かりやすいように視覚に訴え、深く考えられるように工夫されている。

D者は、いじめや生命尊重に関する教材や情報モラルに関する教材が各学年に複数配置されている。伝記や、多様な分野で活躍する著名人などの人物教材を取り入れ、自国・他国の伝統や文化を理解できるように工夫されている。特に、自主・自律・責任に重点が置かれている。

別冊の道徳ノートがあり、単に本冊の設問の答えを記入するのではなく、道徳的な物の考え方を深め、自分自身を見つめられる形になっている。

「学習の手がかり」の中に目当てが入っていることで、何を学習するのか目的が明らかになるように配列されている。また、「自主、自律、自由と責任」「思いやり、感謝」「生命の尊さ」「よりよく生きる喜び」の教材がバランスよく配置され、指導しやすい工夫がなされている。また、指導、学習については、別冊道徳ノートを活用することで、書くことを通して道徳的なものの考え方を深められるように工夫されており、本冊と併用で自分の生き方について考えを深められるよう配慮されている。日常生活や現代的な課題に関する内容があり、生徒の実態に合う指導ができるようになっている。

また、1年生は文字を大きくするなど、発達の段階に応じた配慮がなされている。そして下段に注釈があり、生徒の理解に差異が生じないような工夫がされている。

E者は、生命の尊さに関する教材が各学年に三つずつ掲載されていた。いじめ問題や情報モラルなど、現代的な課題についても扱っており、コラムと併せてより深く考えさせるように工夫されている。小学校教材を掲載し、自分自身の考えの変化や成長を感じ、より深い学びにつながるように工夫されている。

学びのテーマに応じて設定されているユニットが、内容の関連性を意識させる配列になっており、「つなげよう」では、他教科や学校生活と関連させ、問題意識を持つように工夫されている。

学習や指導の部分で、学びのテーマの中の「見方を変えて」は、視点の異なる問いが設定されており、生徒に違った思考をさせるように工夫されている。また、現在活躍している人物を取り上げ、生徒が興味深く学習できるようになっている。

また、淡い色合いに統一されており、文字の大きさなども適切で読みやすい。

F者は、いじめ防止を最重要テーマに位置付けて、多面的・多角的に考えられるようになっており、正面から向き合った教材が各学年に配置され、重点的に指導できるように工夫されている。日本の伝統文化や国際社会に関する内容が各学年にバランスよく配置されている。道徳的な学びのため、現代的な課題や生命の尊さ、心に響く教材が配置されている。また、いじめに関する教材を学年ごとに考慮し、実態に合った配置となっている。巻頭に「道徳科で学ぶこと」「道徳科での学び方」「テーマ」のページが設けられており、これから何をするのか理解しやすい配列になっている。

また、学習と指導の部分で、「考えてみよう」「自分にプラスワン」という二つの設問により、教材内容と自分についての考えをまとめられる工夫がされている。「プラットホーム」の活用により学習内容を多面的に考えることができるようになっており、また、別冊「道徳ノート」に書き込むことで、自分の意見を整理したりできるように工夫されている。

そしてユニバーサルデザインフォントで読みやすい工夫がなされ、目次・テーマにおいては、いじめ、国際理解などが明記されており、何に対する学びなのかが分かりやすい。

G者は、生命尊重やいじめ問題を重視した教材が各学年に配置されている。感動的な読みごたえのある教材が各学年に掲載され、命や自然に関する気持ちが育まれるように工夫されている。生徒の実態に合った教材が1・2・3年とシリーズ化され、各学年とも、より身近に問題として考えることができるように工夫されている。教材の初めに導入として、どんなことを考えていくのか意識づけをすることで学習

の目的が明確になるようになっている。

3年間を通していじめ問題を直接的そして間接的に取り扱うことで、より深く考えることができるように配慮されている。

また、学習指導の部分では、問題解決的な教材や「やってみよう」などの体験的な活動ができる教材が各学年に複数配置されている。教材初めの導入の設問と「学びの道しるべ」は、自分との関わりをさまざまな角度から考えることができるようになっている。多彩な人物教材を掲載し、生徒がより身近に感じられ、意欲的に学習に取り組めるように配慮されている。

また、四つのテーマで色分けされ、バランスよく教材が配置されている。下段に注釈があり、行を示す表示にも工夫がある。

H者は、いじめや命について、「いじめのない世界へ」「いのちを考える」のユニットがあり、複数の教材と組み合わせて重点的に取り扱われている。伝統や郷土に関する取り扱いがあり、宮城県や東北の文化を紹介する教材が配置されていた。そして巻末に各都道府県の人物や伝統文化が配置され、郷土についての考えが広げられるようになっている。また、小学校道徳の教材が配置され、学年間における意識の違いや自分自身の成長を意識できるように工夫されている。

各教材の冒頭にテーマが示され、生徒が考えやすい配列になっている。生徒の作文が実際の行事として配置され、指導しやすい配慮がなされている。設問が「考えてみよう」として、2から3個あって、教師の工夫の余地があると思う。「ACTION!」コーナーが設けられ、役割演技による体験的な学習ができるようになっている。また、「つぶやき」コーナーが設けられ、考えたり思ったことを書き込み、話し合いの材料の充実と言語活動の充実を図ることができるように工夫されている。心情円や「ホワイトボード」は切り取れるようになっており、多様な活動に対応できるように配慮されている。

また、ユニバーサルデザインフォントを使用し、読みやすいように工夫されている。自然を扱う部分の写真は迫力があり、とても鮮明である。

加藤委員

小学校の道徳の教科書を選定した後、中学校として、小学校からどう引き継ぎ、また何が違うのかということも考えなければいけない。そういう意味で、教科書は教師と生徒が使うのだが、教師が使いやすいという点は、より小学校で大事だが、中学校になると生徒が使いこなせるということがとても大事だと思う。やはり生徒が引き込まれる魅力ある内容と学び方のサポートが大事だと思う。また、道徳は読解力が試される科目ではないという点も大事だと考えている。話し合いに導入していく、話し合いがしやすい教材とは何なのか。日常にありがちな葛藤状況の中から正解のない課題状況がコンパクトにまとめられている素材とは何か、こういうことも考えた点である。

また、仙台の中学生に特に重点的に考えてもらいたい いじめや命について、どう扱われているか、東北地方はどう扱われているか。震災と結び付きやすいとすれば、震災はどう扱われているか、そういった点を中心にしながら考えた。

A者は、「クローズアップ」として扱われている部分は物語場面ではない提示の方法で、トピックに端的な問いを用意し、大変ディスカッション向きという扱い方がある。そういう意味で学び方のサポートになる部分だと思う。文章の読み取りでないことが強調されて、ここも中学生向きだと思う。

日本各地域に関連した教材を多彩に扱っていることも、視野を広げ、また自分の地域に目を向けるという意味で親しみが持てる。中1では被災地の復興、中2では福島県の小高地区、中3では陸前高田と、他教科との関連も丁寧に示されている点でも学び方のサポートが感じられる。

皆さんから既に指摘があったように大判で写真も美しく、大変引き込まれるつくりになっている。

B者は、文章の終わり方が淡々と終わっている点が印象的で、その後どうするのかということは読者が自由に考えることができるつくりになっている。いじめについても、同調してしまう場面とか、いやだと主張できない場面、こういったところも丁寧に取り上げており、考えさせられるテーマが印象的である。誰もが陥りやすい状況をイメージしやすい、そういう設定がある。

今回、テキストの重さをはかってみたが、8者の中で一番軽かったのがB者で、扱いやすい重さ、厚さであると思う。

C者は、素材を活用するための工夫として「学級づくり」「心の扉」が充実している。特に「心の扉」は、この部分だけでも1回の授業になりそうなコーナーである。生徒が自ら日常生活や社会生活から例となるエピソードを持ち寄って議論するなど、使い方の自由度も大変高いと思う。そういう意味で、学び方のサポートを感じたところである。

D者は、人権、命に関して重点的に丁寧に取り上げられている。中1では阪神・淡路大震災、中2では相馬野馬追、中3では女川の震災が取り上げられている。震災について、被災とか喪失、防災としての素材だけではなく、地域芸能、文化、後世への継承への力にも光が当てられている点が大変印象的である。

各文章の最後に、過去の著名な人たちの名言が一言添えられており、生徒が個々に思いを馳せることができる、そういう余裕のあるコーナーとなっていて私はとても引き込まれた。

また、体裁についても、分冊の部分、目次項目ごとに内容をまとめるのではなく、取り扱うカテゴリーのテーマと対応させている点、既にこういう力は中学生の発達の段階では付いてきていると思うので、これもまた学び方のサポートとなると思う。

E者は、学びのテーマが本当に開放的、オープンクエスチョンとして示されているのが好ましいと思う。素材がよく練られていて、編集委員会の姿勢と思いが伝わると思う。いじめが多く取り上げられているが、思いやりの行動だったつもりなのに相手を不機嫌にってしまった経験、こういった点を多様な視点から考えさせるような素材や、いじめが生まれる場面でそれぞれの立場から何ができるのかを考えさせる素材。いじめといじりについても、いじる者、いじられる者の立場に立って考えさせる素材。命についても、生まれること、生きるだけでなく、死を丁寧に取り上げることから命を考えさせる素材など、大変重厚な印象である。

「学びのテーマ」のページには必ず「見方を変えて」という設問がある。一つの出来事をいろいろな立場・視点から考えさせようと、そういう設問がされているところが大変印象的で、これも学び方のサポートだと思う。

また、コラムが1回分の授業ほど重要なページとなっていて、ここで取り扱われているものはユニバーサルデザイン、情報モラル、生物多様性、アダプテッド・スポーツ、ネット依存、アサーティブネス、シチズンシップなど、現代社会のキーワード

ードを取り入れて、他教科との関連も明記されている。編集委員会による文章も多く取り上げられており、よく練られていると思う。

F者は、中1の段階で東日本大震災、宮古の伝統芸能が扱われている。中2では阪神・淡路大震災と熊本地震が扱われているという点。中3でも避難所での社会参画として扱われている点、先ほども申したが、被災や喪失、防災としてだけではなく、住民の一人として生きる者たちが地域の芸能や文化、後世への継承の力、社会参加、こういった点に光を当てて描かれており大変印象深く読ませていただいた。

いじめについても重点的に取り上げられている。特に中1では最も重点的な扱いとなり、以後、中2、中3と、相対的には少し減少していくが、現実の学校生活、発達の段階に即している部分だと思う。

単元ごとのノートもついているが、逆にいろいろな個人差を考えると使いやすいという声もあると思う。

G者は、一つのエピソードが4ページぐらいから、長くても8ページぐらいになるが、全体的にはコンパクトな素材だと思う。そしてここも重さを量ると、大きさ、重さともに生徒が扱いやすい、使用しやすい、運びやすい、そういう教科書になっているかと思う。

素材もよく練られていて、バランスよく扱われている。学校生活が身近な話題として取り上げられている素材の最後に、「私はさらに迷った。」、「私は怖くなってきた。」、「私は何も答えられなかった。」という文章の終わり方をしている。そこからやはり一人一人に考える姿勢を提供している点が印象的な文章の構成になっている。

東日本大震災に関して、仙台市の人たちの声を取り上げられている点も個人的にはうれしくなってしまう点である。

H者は、こちらも1つのエピソードが3～4ページに凝縮してコンパクトにまとめられていることが印象的であった。素材の内容が大変バランスよく扱われている。問いは少なめだが、少ない問いの中に、自ら考えさせる精選された凝縮された問いとされている点が印象的である。

また、違う立場になることで気付きを促すという意味でロールプレイが取り入れられており、中学生になるとこういった方法も十分にこなすことができるので、そういう意味で学び方のサポートがされている。

また、このH者も、編集委員会が作成した文章または生徒の作文、こういったものがいずれも学校生活の中で生じる中学生にとって等身大の葛藤課題となっていて、そこに答えを与えず考えてもらおうとする編集委員会の姿勢を感じる。

いじめは、各学年とも多角的な視点から提示されている点が印象的である。

吉 田 委 員

皆さんからも指摘があったが、各者、教材内容が非常に充実していて、大変感心した。本当に子どもたちの道徳心を育もうとする姿勢が現れていると受け止めている。

各者いろいろなコーナーを設けて、さまざまな道徳心を育むためのアプローチをしている。それぞれ優劣つけがたいほど全てが有効に働くと思う。

私としては、今回の学習指導要領の改訂における主体的・対話的で深い学びという授業改善の視点から、議論し、考える道徳の授業ができる教科書かという点と、皆さんからも出ているように、今、仙台市が置かれている学校課題であるいじめ防

止がどのように取り上げられているか、主にこの二つの視点から各者の特長を述べさせていただきます。

A者は、主体的な学びを促す意味で、教材部の初めはタイトルだけとしている。教材部に対して一つの中心設問のみということで、ほぼ全ての教材に1ページのコーナーを設けて学習内容を補完したり深めたりする編集をしていることが特長である。

いじめ防止に関しては、関連教材として各学年4ないし6つの教材を設定しているし、いじめ防止、生命尊重に関して、自己肯定感、アンガーマネジメント、メンタルトレーニングに関するコーナーを各学年一つずつ設けている。そして自己を振り返らせる機会を設定していることが特長である。

B者は、教材文の終わりのコーナーに、主に教材文に関する深い読み取りを促す問い掛けの補助発問例や中心的発問例を二つまたは三つで編集されているのが特長である。

いじめ防止に直接係る教材を1学年に集中させている点も特長で、他の学年は生命尊重などの教材と関連させながらいじめを許さない心を育むのというのが編集の特長である。

C者は、教材文の初めに内容項目と主題名が示されており、学習内容があらかじめ把握できること、教材の終わりにも学びの提案がなされており、一つは、個々人が考えるための問い掛け、それから意見を交換するための問い掛け、さらにはそれぞれの考えを整理する投げ掛けなどで編集されている。

いじめ防止に関しては、一部主題として「いじめを許さない心」と明記された教材もあるが、いじめに特化した編集ではなく、さまざまな教材を通していじめ防止の心を育むような編集となっているのが特長である。

D者は、教材の終わりに、学習のテーマや問い掛けが設定されていると同時に、中心発問的な内容、それから補助発問的な内容で編集されているのと併せて、考えを広げたり深めたりできる点が特長である。

さらにいじめ防止に関しては、多面的・多角的に考えるように、さまざまな道徳的な価値からアプローチできる編集になっているのも特長である。

E者は、教材の冒頭に主題を明記して、学習の見通しを持たせていること、それから教材ごとに1ページの「学習の手引コーナー」を設けて教材に対する問い掛け、それから視点を変えて考えさせる問い掛け、そして道徳的価値の日常化を図ろうとする問い掛け等が設けられているのが特長である。

いじめ防止に関して、直接的な教材が各学年に1つずつ設定されていると同時に、生命尊重と、その他現代的な課題との関連の中でいじめ防止の意識を育もうとする編集になっている。

F者は、教材の初めに主題を明記し、資料の登場人物を明らかにしておくことによって学習のねらい、資料の概要把握に役立てようとしていることが特長である。また、教材の終わりには、中心設問と実践化へ誘う問い掛けで、3年間統一されていることも特長である。

いじめ防止に関しては、いじめに関する教材をユニット化して強調していること、テーマも明確であり、生徒にも強い印象を与える教材を配置している。またコーナーを設けてアンガーマネジメント的な内容を含むなど、編集に特長がある。

G者は、学習の指針の把握や意欲づけを図るために、教材名の下に問い掛けを設定している。また、教材の後には教材に関する発問例、それから自分について振り返りを促す発問例、さらには道徳的価値の日常化を図る発問例と、3年間共通して設定していることが特長である。

いじめ防止に関しては、直接的な教材は1年生で3、2・3年生は2つである。

その他のことについては、現代的な課題、生命尊重とか情報モラルと関連させながら、身近な場面から社会へと視野を広める構成になっていることが特長である。

最後にH者は、教材の冒頭に学習テーマが設定されており、見通しを持った学習ができること、また、教材の終わりには一つないし二つの補助発問や中心発問例、そして1つの道徳的価値の日常化を図った発問例が設定されたコーナーを設けていることが特長である。これも3年間、一貫している。

いじめ防止に関しては、いじめ対応をユニット化している。各学年3教材ずつ設定して、集中的にいじめ防止の意識化を図る編集をしていたことが特長であり、同様に、いじめ防止に関連する生命の尊重についてもユニット化し、命の大切さを強調する編集内容になっているのが特長である。

教 育 長 各発行者ともそれぞれ工夫が示されていて、各委員の発言の中にもそういった特長をよくつかんで発言をしていただいた。

一通り各者のご意見を伺ったので、各委員の意見も参考にさせていただきながら、8者の中で各委員2者または3者程度の発行者を、簡単に理由を付してご推薦いただきたい。中村委員から願います。

中 村 委 員 私はD者とF者とH者を推薦する。D者とF者はノートが別になっているが、それぞれのノートの使い方は異なり、生徒たちが自分から勉強できる形、そして指導がしやすい形がとられている。

H者は、ノートはないが、いじめについての取り扱い部分が多い。また、設問が適量で授業の中で工夫しやすい形がとられている。

加 藤 委 員 私はA者とE者とH者を推薦する。先ほどの繰り返しになるが、内容の魅力と生徒が使いこなせる、あるいは引き込まれるという意味で、A者がディスカッション向きであることや、内容的に震災、各地域の教材をよく読み取れるよう扱っていること。あるいはレイアウトや写真の扱いもA者を取り上げた理由である。

E者も、たくさんの現代的なキーワードを分かりやすく取り上げ、中学生が真剣に考えられるように提示していること。「見方を変えて」という、視点の転換について、自分の考えだけではなくいろいろな見方をしてみようという意味での学習のサポートのきっかけを与えていること。いじめについても丁寧に扱っていることから推薦する。

H者については全体のバランスのよさ、ロールプレイの扱い方、またいじめについての扱い方、素材文について編集委員会の独自の文章が取り上げられていて、そこに違う立場になることで気づきを促していく視点が印象的だったことから推薦する。

吉 田 委 員 私は、A者、F者、H者を推薦する。

A者は、議論し考える道徳、それからいじめ防止という2つの観点から見て、どちらかというといじめ防止の関係で、関連教材の数がある程度多い。また、自己肯定感とかアンガーマネジメントとかメンタルトレーニングのための新たなコーナ

一を設置していることでA者。

F者については、議論し、考える道徳として、子どもたちが自ら見通しを持って教材に向き合えるような冒頭の提示の仕方、それから一貫して中心設問的なもの一つと、生活化を図れるような設問で構成されている。併せてノートと関連があり、ノートを使うことによっておのずと議論するような場面設定になっている。

いじめに関しては、1年生で3ユニット、2年生で2つのユニット、3年生で1つのユニットで7教材、5教材、2教材という、教材の多さということで、本来ならば、子どもたちにはさまざまな道徳的な価値を通していじめ防止という心を育んでいきたいが、仙台市が今置かれている状況を考えると、しっかりと受け止めていただきたいことから、こういう強調された編集内容であることでF者。

H者も、議論し考える道徳として、冒頭にテーマを投げ掛けて、そして2つなり3つの設問を置いて、その中間にメモ的なコーナーがあって、そこに記述しながら議論を深めるのに役立つ編集内容であり、いじめに関するユニット、生命尊重に関するユニットも明確に設けられている。よって、シンプルな構成ながら、繰り返しの中で確かな心を育むことができる編集内容になっていることでH者。

里 村 委 員 私はA者とD者を推薦する。

A者は、加藤委員、吉田委員の繰り返しになると思うが、内容的に非常に優れているということと、中学生であればこの教科書を扱って授業を十分こなせるような力をつけてほしいという思いがある。

D者は、別冊の「道徳ノート」を使って授業自体を深めたらどうかという思いがありA者とD者を選んだ。

いじめ問題についての個人的な見解だが、実は道徳というのはいじめの問題ではない。今、仙台市が特別にそういう状況に置かれているが、他府県でも同じような事情がある。そうすると、いじめの問題は避けて通れないし、どの教科書もいろいろな取り組みの中でやられているが、いじめではない部分の道徳をどう評価するかということに私は力を入れた。つまり道徳という授業はいじめの問題だと生徒が誤解しないような教科書にしてほしいという思いがありA者とD者を選んだ。

選ばなかった教科書は、少し乱暴な言い方をすると、道徳の教科書イコールいじめの教科書という傾向が強いものを外した。

花 輪 委 員 私はA者、E者、H者の3つを選ばせていただく。

A者とH者は、非常に身近な教材を扱っていることが印象的である。必ずしも歴史上の偉人の話等々ではなく、生徒たちが自分のことのように考えられる教材が非常に多い。特に構成がシンプルだが、一人一人に考えさせるようなものになっているというのはA者、H者ともに言えると思う。

E者は補助教材が非常に多く使い方に工夫が必要だが、1冊にまとまって書かせるところまで丁寧にテキストが成り立っている。

齋 藤 委 員 私はA者、E者、H者を推薦する。私も、仙台市が今抱えている問題として、いじめを許さない心や、命の尊さが最重要だと思うが、「特別の教科 道徳」というものがいじめだけに特化してはならないと思う。もちろん仙台市では様々な配慮は必要だが、道徳は命の重さの重要性や、自分を大切にすることは人を思いやることもでき、人の生き方を認め互いを高めることができる未来性を知ることである。だから、自分たちの生き方・考え方を十分に模索することから、いじめを許さない心

を育てるべきだと考えている。

A者は、考えを深める「22のカギ」が明記されている部分で、生徒たちが非常に分かりやすいということ。

E者は、4つのシーズン、9つのユニットという形でバランスよく配置されていること。

H者は、30教材のほかに5教材が収録され、実態に応じて柔軟な指導ができるよう配慮されている。また、2年生の教材「読書で広げる道徳」のページに、自分は今からどう生きるのかのヒントとなる本の紹介がある点もあげたい。

教 育 長 各委員から推薦いただける各発行者を発表していただいた。集計してみると5つの発行者が推薦された。A者、D者、E者、F者、H者の5つに絞って今後の議論を進めたいと思うが、皆さん、こういった取り扱いでよろしいか。

(異議なし)

教 育 長 それではそのような進め方をしていきたいと思う。
ここで一旦休憩をとり、再開は16時00分とする。

(休憩 午後3時45分～午後4時00分)

教 育 長 それでは再開する。

先ほど各委員からご推薦いただいたA者、D者、E者、F者、H者に絞って、これから議論をしていく。

まず、本市における中学校の道徳教育を考えるときには、いじめ問題を含め、命の尊さ、人権尊重などの取り扱いに重点を置き、生きる力の核となる豊かな心の育成を目指していくことが大事であると考えられる。また、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うためには、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考えを深める、こういった学習も大切だと考えている。

ここで、議論の参考として、事務局から補足説明をお願いする。

道徳担当指導主事 議論の視点について、補足説明させていただく。

まず、本市の喫緊の課題に対応して、生命の尊さや人権尊重などの各者の取り扱いについては、お手元の別紙資料3、調査研究委員会、専門委員会の報告1の内容に関すること(1)(3)にその特長がまとめられている。また、同報告書2には、その取り扱い教材数や分量を取りまとめた報告も記載されており、各者の違いを確認することができる。

さらに、別紙資料2、調査研究委員会報告書や、別紙資料6、宮城県教育委員会の別冊資料には、数量的分析データと併せ、生命の尊さや人権尊重などに関連する記載内容、教材名、資料名もまとめられている。

2つ目の、物事を多面的・多角的に考え、自己の考え方について考えを深める学習を行うことに関しては、別紙資料1から3の各報告における学習と指導に関することを参考にしていきたい。こちらも考えさせ方のアプローチや、他者の意見を聞いたり考えをまとめたりする方向にそれぞれ工夫と特長がある。

道徳的諸価値の理解や他者理解、自己を見つめるなどの道徳のねらいに迫ってい

くためには、問題解決的な学習や活発的な言語活動等が授業において積極的に行われる必要があることから、教科書での取り扱いは大切なポイントになると思われる。

教 育 長

これから絞り込みを行うわけだが、5者についてご意見、特にいじめ問題を含めた人権や他者を受け入れる、あるいは自己を振り返って考えを深める、そういった視点でご意見をいただければと思う。5者全てに対しての意見でなくても構わない。

吉 田 委 員

いじめに関することについては、いじめが全てではないということはそのとおりだと思う。いじめについて、私たち、それから子どもたちもしっかり受け止めて、道徳という時間を一つの手段として考えを深めることが大切だと思っている。したがって、A者において、これは生命の尊重とも関係するところだが、自己を肯定するような場面、アンガーマネジメント、メンタルトレーニングというものを各学年ワンコーナーずつ設けて蓄積していくことが効果的だと思う。

多角的・多面的に物事を深く考えるためには、子どもたちは見通しを持って学習に取り組む必要がある。例えば教材文に学習のテーマが設定され、教材文の登場人物が分かった上で取り組むことで内容把握がスムーズにいくと感じる。中学生の授業形態は小学校と違って教科担任である。いろいろな教科の先生が学級担任であるがゆえに、その時間だけ道徳の授業をするので、切り換えをしなければならない。そうしたときに、子どもたちも先生もある程度の指針をつかんで授業に取り組める提案がなされていることが大切である。それから授業は50分間で完結しなければならない。補助資料等は、もしかすると家庭での学習にならざるを得ず、個人任せになる可能性がある。そうすると、一つの教材文を50分で完結させると考えたときに、教材の終わりは適当な量の問い掛けが準備されている、それでもって先生は問い掛けをする。ただし、それが多過ぎると、先生がそれに頼り過ぎてしまう可能性がある。となると、やはり学級の実態をよく知っている先生が、回りの補助設問というものを考える余地も残されているということで、適切な量が設定されているのがF者、それからH者だと受け止めている。

花 輪 委 員

5者それぞれに特長があり、非常にいい教科書だと思う。

私は別冊、もしくはノートの存在をどう考えるかということで悩んだ。これは昨年と同じことがあり、結果的にはノートや別冊がない者に決まったが、今回も見てみると、D者は本当にいいと思う。自分自身を振り返って道徳的価値、あるいは多様な価値観、そういうものをずっと見つめて文章を書くというのは大変いいものになっていると思う。一方で、吉田委員の意見にもあったように、とても多忙な先生方、それから生徒自身も部活等々で忙しい中で、十分こなせるのかなと少し心配になった。

F者は、D者と違い、一つ一つの一番後ろの2つの問い掛けに対して答えなさい、それから他者と話した議論の結果を書きなさい、最後に、自分がどのぐらいそれに対して考えられたか5段階評価してみなさい、というつくりだ。これを50分という短い時間でこなせるのか。課題が多過ぎるのではないかとということで、私自身はA、E、Hの3者を推薦する。一番大事なのは、教材に対して自分が、そしてクラスのみなどいろいろな議論をして、多様な物の見方を醸成するのが必要だと思う。そこで教員が方向性を決めて、みんなで一つのことを議論する。そういう場がどのぐらい容易につくられるかという観点から考えた結果、A者もしくはH者が教材の中身、分量等で良いと思う。

E者は非常に多様な教材を準備しており、これをどう料理するかは先生の指導力に掛かると考える。大変迷っているが、その観点から推薦させていただいた。

いじめは、いずれの者も真正面から扱っており、その中でどういうふうにも他者とつき合うのかということをもどの者も考えられる配置、教材の内容になっていると思う。

中 村 委 員 先ほど私はD者、F者、H者と申し上げたが、実はもう1者迷っていたのがA者であった。A者についても、生きる上での選択肢が広がるような、体験的な学習ができたりするような教材が大変多く入っている。そして生命尊重という部分でもしっかりとした考えが述べられていて、子どもたちもこれに対してきちんと取り組めるのではないかといいものもあったのだが、そういった意味で迷っていた。

ただ、私が先ほど挙げたのはノートの存在である。去年はノートの無い者を選ばせていただいた。先ほども出たが中学校は教科担任で小学校のように全部の教科を教えている先生ではないということもあって、ノートがあったほうが子どもたちも入りやすく、比較的授業に入りやすい形に持っていけるのではないかといいことで、F者を選ばせていただいた。

D者のほうだが、内容に即したものは別に自分自身を見つめるという部分で授業をした後に、そういったものが取り入れられていくことで、子どもたちの心もより豊かになると思いい選んだ。また、親としてもこういうことを習ってほしいという思いいもある。

もう一つ、H者だが、とてもバランスがよいい思いいった。そして設問がそんなに大きくなく、ノートがあるわけでもないが、逆に50分間で先生の裁量でいろいろなことが、工夫の余地があり、「ACTION!」コーナーや「つぶやき」コーナーを使いながら、自分自身の思いいをきちんと持っていくことができると思いい選ばせていただいた。

齋 藤 委 員 私は、まずD者、F者の別冊ノートについては、記録として残しておき、子どもが自分自身の成長を見つめ直すには大切だが、ノートを書くという作業の時間が足りなくなる、宿題になってしまうのではないかといい懸念がある。

A者は、題材が細かく配置されており、友情、信頼、公平公正、社会主義、思いいやり、生命の尊さ、よりよく生きる喜びなどに力を大いに入れていることは、仙台の抱えている問題を解いていくためにも良いい教材だと感じている。ただ、初めて道徳科という教科になることで、現場では子どもたちの心の育ちが記録として残る部分も必要であろうと考える。本当は議論し合ったり、いろいろな話合いを行う中で、うまく表現はできないが心の中の思いいがたくさんある生徒もいるので、そのあたりを把握するには、やはりある程度の記録があったほうがいいのではないかといい思う。その点から言いいと、E者、H者は適度な量で、思いいった時にメモがとれることが非常に良いいと感じた。

いじめについてストレートに取り上げるところもあるが、これは先生方の教材の使い方、進め方での工夫の一つとなるであろう。生命の尊重について語り合いを命はかけがえのない大切なものだといいことを分かっていくことで、人を思いいやる心を育むことが、結果「いじめを許さない心」につながるはずである。その点から先生方の教材の選いい方を多面的に考慮すると、私はE者とH者を推したいと思いいう。

加 藤 委 員 なかなか難しいところだが、中学生になって、小学生とは違いい意味でグループ

ワーク、あるいはディスカッションすることの素材になってほしい。ということは、いろいろな子どもたちがいるけれども、誰にでもある程度共通して自我関与できるような、自分のものとして考えられるような素材であってほしいということがベースになると思う。そういう意味で、どの者もよく考えられており、ここだけをというところが難しい。

もう一つは、素材文の量が多いと注意が散漫になっていくのではないかという部分。生徒全員が一つのものにぐっと、短い素材文の中で自我関与できるのはどういう部分だろうか。ある程度コンパクトにまとめられたもの、シンプルなものということは考えた。しかし一方で、答えが一つではないということは、さまざまな考え、アイデアが浮かんでこなければならぬので、シンプルでありつつ、さまざまな考えが浮かんでくる教材とはどういうものなのだろうと。本当にその部分で難しい。

そういうところを考えると、A者、E者、H者の3者がバランスよく提示されている印象が強い。

E者は、トピック的には大変多かったが、選んでいけるのではないかという部分も感じた。つまり現代社会の中で考えてもらわなければならないことは大変たくさんあるけれども、その中で教師の裁量、あるいは生徒たちの主体的な選択ということもあり得るのかなと思ったところと、視覚的に優しかったという点がある。刺激が強過ぎると、どのお子さんも皆、標準的に大丈夫ということではなくて、視覚刺激に弱いお子さんたちもいると思ったので、そういう意味で、教科書が大変優しかった。

A者、E者ともにタイトルに価値が含まれていない。目次を読んでいくと分かるが、何がいいという部分が既にタイトルに含まれていると価値誘導的になってしまうと思った。そういう意味で普通のタイトルというか、価値から離れているところもディスカッションしやすいと思う。

里 村 委 員 私もH者とF者については、四つということであれば選びたかったが、なぜ選ばなかったかということをお話しする。

F者は、内容はなかなかいいが、いじめ問題について余りにもストレートに扱い過ぎていて感じた。

H者は、皆さんから出たようにバランスがとれているのでいいと思うが、些細なことかもしれないが多少懸念したことがある。それは編集委員長の方針がないことである。また、委員長に当たる方が二人いるので、一人のリーダーの基にしっかりとした指示の中でつくられたのだろうかという疑問がある。これは形式的なことについて意見を申し上げているので、正しくないことも大いにあるが、それが少し疑問であった。編集長に当たる方が3人いる者もあるが、そこは3人の方々がそれぞれ自分の思いを書かれている。

もう1点は、非常に大事なところとして、「中学生は忙しい。部活に勉強に加速していく日々とともに、体も心も大きく変化する中学時代。悩みやトラブルも待ったなし。そんな中でも、週に一度は立ちどまって今の自分を振り返る。少し呼吸を整える。これからの道徳がそんな時間になりますように」とある。この部分は他者と比べると際立っている。私の解釈は、道徳を教えることは、ずっと人生、1年、毎日通じて考えていかなければいけない。それを、君たちは忙しいのだから、道徳の時間ぐらいは命のことを考えようと誘導しているように感じる。それがH者を選

ばなかった理由である。

私はD者を選んだが、内容が非常に優れていると思う。一番迷ったのは、先生に別冊ノートを取っただけの余裕があるかどうかということである。これもD者とF者は別冊ノートがあるが、D者のほうは本文とは少し別の角度で、立体的になるような別冊になっている。F者は、本文をもう一回重ねたような別冊になっている。なので、別冊の在り方としてはD者のほうが優れていると思った。

私はA、D、F、Hの4者が頭にあったが、2者か3者ということなので、今のような考えでA者とD者を選ばせていただいた。

教 育 長 一通り委員の皆さんからご意見をいただいたわけだが、改めてこの発行者はこういった視点があって優れているというようなご意見をいただきたい。今までの発言と重なる部分もあろうかと思うが、絞り込みするに当たり、こういった視点がほかの発行者、5者の中で、比較して優れている、注目したいという部分があればお願いしたい。花輪委員、いかがか。

花 輪 委 員 生徒一人一人が自分を見つめたり、他人との関わりを考えたり、それから自分が今から生きるために社会とどう関わりがあるかということなどを常に考える授業がやれる教材がいい。そうすると、A者とH者がそれによく対応できるような細かい配慮をしているように思える。既に何人かの委員からお話しがあったように、例えばA者だと巻頭にガイダンスのための手引がある。一つ一つの教材も分かりやすくテーマが読み取れるということで、そこが優れていると思う。一方、H者のほうは書かせることもしているし、巻末に自分を振り返るシートが3枚あり、しっかり考えたことをそこに落とすという作業も要求しているところが優れていると思う。

里村委員がお話しされた別冊あるいはノートをどう考えるか。大変悩むが、そこまでやりたいという先生も多いというお話があったが、全てのクラスでというときに負担にならないかなと思える。そういう点で、二つということであればA者とH者というのが、クラスの中で議論が活発になって、なおかつ一人一人が自分を振り返る余裕もある教材、テキストになっていると思う。

教 育 長 花輪委員からは2者に絞った形でご意見をいただいた。同じようにご意見をいただきたい。

中 村 委 員 私は、皆様のご意見をいろいろ聞いたところで、2つに絞るとすればF者とH者。ノートについてはいろいろな意見があると思うが、D者のほうは先ほどいろいろな観点から、例えば授業の中で取り扱うのが難しい、別時間になってしまうのではないかということもあるが、F者に関しては授業の内容に沿ったものになっているので、一つの教材について思ったことをここに書き込むのであれば、それほど負担にならないと思う。そしてこれがあることによって、先生もその流れに沿って話をしやすいという気がする。

H者は、本当にシンプルな設問、そして中にもいろいろ書き込める部分もあるなど、先生の裁量でいろいろなことができる。「ACTION!」コーナー、「つぶやき」コーナー、「ホワイトボード」など、多様な活動ができるように配慮されているので、F者とH者を推薦する。

教 育 長 ありがとうございます。同じようにご意見を求めるが、加藤委員はいかがか。

加 藤 委 員 ここからなかなか動かないが、A者とE者とH者、まだ絞れないところである。どれもよくて、なかなか難しい。もう少し考えさせていただきたい。

齋藤委員 5者とも甲乙つけがたく、素晴らしい完成されたものだと思う。記録の点を取り上げると、D者、F者のノートは記録の量が多いのではないかと察する。けれども、先ほども述べたように、生徒の考えを知りたいという教師の立場を思うと、ある程度のメモも必要と考えて、私はE者とH者を推したい。

吉田委員 私もF者とH者。子どもたちに議論させたい、対話をさせたい。それは一斉指導という授業形態ばかりではなく、グループで自分の考えを発表し、互いの意見を交換させて、新しいものを発見させたいという気持ちがある。そうすると、F者のノートだが、これを要するにメモとして考えたいと思う。自分の考えをメモして、そして人前で発表する。実際、中段に、友達の見解や話し合いをメモしようというコーナーがある。ということは、グループトークや意見交換を設定しているわけである。そういう活用であれば、それほど時間が掛からないと思っている。そして授業にも起承転結、いわゆる最初、提案されて、話し合っ、最後まとめるということができる。

H者にも学習テーマが出されていて、補助設問、中心設問の中で自分の考えを簡単にメモするコーナーもある。やはり子どもたちがそれぞれに意見を交換できる授業がつけられる教科書編集になっているということで、改めてF者とH者と述べさせていただく。

教育長 里村委員、今まで5人の委員の方のご意見を伺ったところでいかがか。

里村委員 皆様のご意見も大いに尊重しなければいけないと思うが、なぜA者はそういうことができないというご判断をされたのか吉田委員にお聞きしたい。

吉田委員 授業のやりようによってはできる。A者の特長は、最初にテーマがなく、学習をする中でおのずとそれに気付いていくという形態をとっている。私の考えとしては、やはり課題や学習テーマがあらかじめ設定されたほうが子どもたちにとって見通しが持てるという考えである。3者選ぶのであれば、A、F、Hが私の候補であった。そういうことで精査させていただいた。

里村委員 よく分かった。私はそういうガイダンスをつくらないほうが道徳の教科書としてはいいという気持ちが強くある。テーマを設定し、手取り足取りガイドせずに、自由に読んで考えさせることに重きを置いたものだから、A者のほうがいいと感じた。教科書の特長について理解は一致していると思う。

H者は、悪くはないが、バランスがとれているというのは非常に大事なことだと思うが、これから中学校で道徳をやっていくときに、力強い教科書でスタートさせてあげたいと思うので、例えばガイダンスがなくても先生と生徒が自由に考えるとか、隣のクラスと違う問題設定で授業をするなど、いろいろとチャレンジさせたらどうかということでA者を選んだ。H者が悪いと言っているわけではない。

F者はいじめ問題に向き合い過ぎているのではないかというのが私の意見だが、教科書を選ぶときに、思い切っ、いじめ問題に面と向かった教科書を選ぶべきだという意見なのか伺いたい。

教育長 里村委員から提起された仙台市の喫緊の課題であるいじめ問題、これについては各者ともかなりページを割いている。そういう点で、仙台市としての喫緊の課題であるいじめ問題について、教科書としての在り方、考え方について皆様のご意見があったらお願いしたい。

加藤委員 いじめというのは、テーマであり、どのようにその場面あるいはその素材を考え

ていくかというとき、道徳が求めている自分をどう見つめるかとか、他者の存在をどう考えるかとか、そこでコミュニケーションとか、どのように関係づくりをしていくのかを考えるための一つの素材だと思う。

この素材を使って自分たちのコミュニケーション、人の関係、そして自分はどういう人たち、環境に囲まれているのかということを考えていけるようになってほしいと願っている。

里 村 委 員 他の例が今あったが、もしそういう状況になったときに、元のいい状況に戻すために先生はいろいろ指導されるが、こういうのは道徳の時間だけしかやってはいけないことなのだろうか。

加 藤 委 員 そんなことはないと思う。

里 村 委 員 いじめ問題を道徳でキャッチすること自体が分からない。もちろん国語の授業とか社会の授業でもいじめの問題に関係することはあると思うし、余り例はないかもしれないけれども、理科でも数学でもあると思う。いじめ問題は教科で担当させる話ではない。でも道徳には非常に大事な受け皿になってくれという考えはある。いじめの問題を受け止めるという意味では、どの教科書もやられているので、教科書を選ぶときに、仙台市の大事な課題だからといじめの問題を道徳の時間だけに絞り込まない方がよい。道徳はいじめの問題だけではなくもっと本質的な生き方、生きる力、あるいはほかの人の多様性を受け入れる力、いろいろご説明があった。そういう時間に持っていけるような教科書にしてほしいと思う。簡単に言うと、いじめ問題は教科書を選ぶときの必要条件であって、必要十分条件ではない。つまり十分条件としては、いじめ以外の本来的に持っている道徳の授業を先生がやれる教科書を選んでほしいと思うわけでA者がいいと思う。ちょっと高い位置から道徳の教科書づくりをしているのがA者だと思う。ただ自由度があるものなので、教える先生としてはガイダンスがないという意味で扱いにくい教科書ではないかというご意見もよく理解している。

吉 田 委 員 先ほども言ったように、本来なら、あらゆる道徳価値の学習を通して、いじめというより、人権の問題であったり人格の尊重であったり、良好な人間関係づくりの学習になるべきだと思うけれども、今仙台市が置かれた状況にある程度協調し、道徳の時間でもいじめに関する学習をしようということで、私は一定程度、いじめに着目して見させていただいたわけである。もちろんA者もいじめという学習テーマを設けて、この教材とこの教材とこの教材はいじめをなくすための教材ですと銘打っている。各者全てそういうふうにとらえていると思う。なので、いじめだけではなく、背景は人権教育であったり、人格の尊重であったり、良好な人間関係づくりを目指すことでいじめをなくそうということで、その視点で私は見させていただいた。

教 育 長 皆さんからご意見いただき、加えて委員同士の意見交換も行われたところである。5者について議論を重ね、視点としては、50分の中で先生が授業をきちんとできて、しっかりと子どもに伝える。中学生としてはそれをしっかりと理解して受け止めることができるという視点。それから全ての教科書についてはいじめ問題が掲げられ、きちんと教えることができるということにはなっているので、さらに、生徒自身が主体的に考えられるという視点も大事だと思う。

今までの意見を伺い多数決ではないが、絞り込むといった場合にどういった形の絞り込みがよろしいか。

- 加藤委員 単純に先ほど出た集計で言えば、A者とH者にならないか。
- 教育長 メモをとってということからするとF者の意見も出たが、それはH者も同じメモ書きから、先生との対話につながれるというところなので、そういう意味で受け止めたわけだが、先ほどいただいた意見からするとA者も多かったということで、委員の皆さんとしては先ほど多かったA者、これも最終的に俎上にのせて議論したいということかと思う。そうすると、A者、H者という形で議論を進めてよいか。
- 里村委員 皆さんの意見ではF者かH者か迷われてH者を選んだ方が多い。F者を選ばないでE者を選んでいるのが多い。それからA者自体はほぼ全員選んでいるので、H者とA者は残し、もう一つ残すとすれば、F者にするかE者にするかの議論が必要かと思う。
- 齋藤委員 私はE者を選んだ人間だが、どちらかというところと少数意見になる気がする。今これから決めていく段階で見ていくのであれば、一番表立って出てきたもの、A者かH者かというあたりを議論していったほうがいいのではないかという気がする。
- 教育長 そのほかの委員の皆さん、絞り込みの場合、どの辺がというところをお話していただければと思う。
- 里村委員 私が申し上げたのは、A者とH者は選ぶにしても、E者とF者との比較が飛んで、F者を選ぶのは手続きが不十分ではないかと申し上げた次第である。
- 教育長 それでは、改めて皆さんにお伺いするが、先ほど皆さんからいただいた意見でA者とH者が多かったわけだが、この2者を最終的な俎上にのせて議論したいという意見があったので、そういった取り扱いでよろしいか。

(異議なし)

- 教育長 それでは、A者とH者に絞ってこれから議論を進めていきたいと思う。
- 里村委員 私が一番に気になっているのは、H者の内容解説資料に「中学生は忙しい」というメッセージがあること。忙しいというのは心が亡びると書く。どんなに忙しくても時間を整理して、忙しくないように振る舞っていかねばいけないということだが、私の人生訓にある。まして、教育の段階で「中学生は忙しい」と決め付けているアプローチがとても気になる。つまり道德の教育をするにしても、生徒に向かって「君は忙しい」とまず決め付けてから、忙しくない時間をつくって道德の時間に臨めという、この考え方が受け入れづらい。教科書自体は、皆さんもご指摘したように非常にいいものである。バランスがとれているという点は一致した評価である。先生も使いやすいという評価をされていると思う。であるから、ここのところに非常に抵抗がある。
- 齋藤委員 内容解説資料に記載されていて、教科書に記載がないということは生徒が見るわけではない。
- 里村委員 それは私の質問に答えていない。編集した人たちがそのように思っていることに対して疑問を呈しているわけである。
- 齋藤委員 ただ私は、この8者の中でも編集者の人数が一番多く、いろいろな意見を出されて行き着いた結果だと思う。
- 里村委員 編集者がみんなで集まって、最後の大事なページにこういうメッセージを書いている。そこについてどういう考えがあったかを聞きたい。教科書に書いてあったら、

私はもとより選ばない。このメッセージは、なかなか理解しにくい。どういう考えだったのを編集者の皆さんに一度確認したいというのが本音である。

齋藤委員 里村委員が指摘の部分だが、これは生徒に向かって話しているというより、教師も一緒になって考えていくべきことである、と私は受け取りたい。

里村委員 受け取り方は自由だが、こう書いてあることは事実である。受け取り方は人によってさまざまでよろしいかと思う。

教育長 A者とH者をこれから俎上にして選ぶわけだが、委員の皆さんにとって、A者とH者を評価していただく際にこういった点がいいというご意見をいただきたい。加藤委員、2者を比べての評価をお願いしたいと思う。

加藤委員 繰り返し話してきたことの中に、素材となるものはできるだけコンパクトであってほしいというところがある。A者は大判にしたことで一步出たかなと。つまり、大判にしたために、たくさんの字がそこに埋められることになり、ページ数的には一つの素材はそう多くなくまとめることができた。そういう意味で、生徒たちの注意力を削がないのはいいところだと思う。また、タイトルを見た段階で何かこういうふうには答えればいいのかという望ましい答えの誘導がない。写真がきれいで、そういう意味でも注目を削がない。あとは「クローズアップ」のところで、このまとめが各素材についているところがいいと思った。

Hについて、それがだめだということはない。ただ一つ、タイトルが例えば目指すところを既に示している部分が気になる。自分でも選んだものであって、素材的な意味ではとてもよい。ページ数的にも短い素材でまとまっているので、比較でなかなか選べない部分を感じている。難しいところである。

まとめやノートに代わり、書き込みの部分をどの程度授業の中で活用できるのか。書き込み部分があることで自由度を損ねたり、逆にこれがあることでまとまりがよかったり、それは授業方法論になる。

教育長 中村委員はいかがか。

中村委員 私もまだ決めかねてはいるが、A者は、主題名をあえて表示しないという工夫がなされていて、子どもたちに自分で気付かせて内容に入り込んでいくというところがある。ただ、そうなったときに、先生の持っていき方でどのくらいそれが時間的に子どもたちに気付かせるような仕掛けをしていけるのか。読んだだけですと入る子もいるだろうが、分からない子もいるので、一概にこれがよいとは感じない。

H者のほうは、逆にタイトルがあることで気持ちが入りやすいという部分もあるのかなという感じもしている。

設問の部分だが、A者のほうは本当に1行あるので、その後に「クローズアップ」「クローズアッププラス」という部分があって広げていきやすい。そして設問が1つというところで、先生の力量が問われる部分なのかなと思う。H者のほうは、設問が大体2個から3個くらいという形になっているので、50分という授業時間の中で話がうまく先生のほうでも持っていきやすいかなというところを今見ており、どちらがいいかというのはまだ分からない。

教育長 花輪委員はいかがか。

花輪委員 A者とH者についてはここに来る前から迷っていて、どちらもいいと思った。里村委員が指摘された編集者の志はいかがかということが、テキストにどう反映されているかというのは大変難しい問題であるが独立して考えたいと思う。

どちらもとてもいい教科書だと思うが、先ほどの繰り返しだが、工夫というか、より深く、より多面的に、より生徒同士が話し合っ、そういったことをうまく導入させる、持っていくような仕組みというのはH者がいい。もちろんA者もH者も、教員側のスキルでうまく生かせると思うが、いろいろなところに仕組みをつくっているという意味ではH者が少しリードしている気がする。

教 育 長 齋藤委員はいかがか。

齋 藤 委 員 私は、先ほどA者を含む3者を選んだ時点から2者に選び直した際にE者とH者を推した。A者については、先ほども言ったとおり非常に素晴らしい題材が含まれている。

ただ、今回は特に道徳が教科として行われるので、教師が使う上においてどちらのほうが扱いやすいかという部分から言うとH者の幅広さを感じる。

教 育 長 里村委員はA者とH者を比較していかがか。

里 村 委 員 教科書を直視して議論するというより、別の立場から議論したいと思う。それは道徳を担当する中学校の先生方の状況とか、実力という失礼かもしれないが、教師としての実力もいろいろある。そういう中で、どちらの教科書がよりいいかという視点だと思う。道徳はいろいろな科目を担当している先生がやるということを考えたときに、どちらの教科書のほうが先生方としては使いやすいだろうかという観点で議論をしたらいい。

最初にH者を見たときに「つぶやき」という欄があって、皆さんはなかなかいいという評価だったが、僕は直感的にまずいと思った。それはなぜかという、スマホにしてもSNSにしても、今の子どもたちは非常に短い文章をやりとりしている。あれは本当にいいことだろうか。我々のような社会人でもスマホでやりとりしている。しかも近くにいる人とやっている。そういう意味で、道徳の教科書も、簡単に1行か2行ちょっと書く、それを誘導するような小さな欄についてはやはり抵抗があった。そういう意味でも、なかなか先生は扱いにくいかもしれないが、大きくくむA者の魅力は捨てがたい。

教 育 長 里村委員、先生方にとって使いやすさという視点をお話ししていただいたが、使いやすさという視点ではどちらか。

里 村 委 員 多分H者ではないかと思うが、先生方の中には、ここまで手取り足取りする教科書は嫌だという方も何人もいらっしゃると思う。そういう先生方は多分A者のほうを好むのではないかと思う。平均に合わせて教科書を選ぶか、少し高いところを目指して教科書を選ぶかという選択である。皆さんの意見を聞いていると、先生方もH者のほうが使いやすいと思われる方が多いのではないかと思う。

教 育 長 吉田委員はいかがか。

吉 田 委 員 皆さんおっしゃるとおり、いいところもあるし、それが裏を返せば課題、まさに二律背反的な教科書だと思っている。

A者は、本当に内容が豊富である。本教材文の後に新たなコーナーを設けて、そこにも教材があり、内容は非常に深い。しかし、子どもたちと一緒に授業の中で展開したときにどの程度まで入り込むことができるかという課題が見えてくる。

もう一方、H者は皆さん方がおっしゃるように非常に親切だという話があるが、ある意味、起承転結、ねらいがあって授業を進めて、最後はまとめるという構成になっている。裏を返せば、下手すると授業がワンパターンで終わるのではないかと

いう心配がある。そういう両方を考えたときに、仮に道徳主任がすべての道徳授業をするのであれば、私はA者のほうがいいのかと思うが、いろいろな教科を担当している者が学級担任であることを考えるとH者と言える。ただ、里村委員が言ったように「つぶやき」のスペースの狭さが果たして効果的なのか。幾らメモにしても、授業の中で話し合いをするなら、ある程度の自分の考えが整理できるぐらいのスペースがあったほうがいいのかというのは前から感じていたところである。そこは目をつぶったとしても、授業を進める上で、しかも道徳が初めて教科になるという意味ではH者だと考えている。

教 育 長 先ほど中村委員にお伺いしたところ、まだ決めかねているというところがあったが、ほかの委員の意見も聞いた上でお話、ご意見をいただければと思う。

中 村 委 員 皆様のご意見を聞いて、私はH者だと思った。「つぶやき」についても枠は小さいとは思いますが、ここに何か思い切り書き込むというより、思ったことを、メモ書き的な使い方をするのだと思った。それは場所も小さいので、インスピレーションというか、読んで、これについてこんなことを僕は言いたい、私は言いたいというような思いつきをここにさっと、例えば単語でも構わないが書く。そしてそれを基に議論を重ねていくような取り扱いなのだった。

設問の量が適切で、先生の裁量でいろいろと工夫できる。そして先ほどお話が出たように「ACTION！」や「つぶやき」について、どんな先生でもある程度のところまでやっていただける仕組みがある。そしてグループ討議ができるように「ホワイトボード」のようなものも用意されて、みんなで議論するということがここには出ているという点でH者を推薦する。

教 育 長 一通り委員の皆様のご意見を伺ったところだが、先生方にとって授業のしやすさという視点も大事だと思うが、生徒にとってA者、H者、どちらがいいかということもあろうと思う。また、生徒にとって、A者であれH者であれ支障なく授業を受け、道徳の時間の理解が進むという点では、A者、H者とも問題がないという点をあえて確認したい。先生の視点だけでなく、生徒の視点でも委員の皆さんにご意見をいただきたい。

里 村 委 員 そういう意味では、私はA者のほうが優れていると思う。中学生のレベルが十分理解できていないところもあるが、読み物としてはA者ではないか。特設ページや、「クローズアップ」という欄が設けられており、一層理解を深めることになっている。

教 育 長 中学生が理解を深めるということで、どちらがいいということもあるが、十分レベルに達しているかという点でご意見を伺いたい。

吉 田 委 員 子どもたちにとってよい教科書は、まずその前に教師にとってよい教科書に位置付けられるのだと思う。料理に例えれば食材。教師がこの食材をきちんと調理できなければ、子どもたちに与えることができない。きちっと調理されたものを与えることによって子どもたちに育ちがあるということで、まず教師にとっての使いやすさということを考えていかなければならない。そういう意味で先ほどのH者ということである。ただ読むだけなら、内容的にはA者が良いと思う。

加 藤 委 員 論をかき混ぜてしまうかもしれないが、発達の段階とか発達という言葉が使われていた中に道徳の発達もあり、中学生は非常に幅が広くて、前の段階のいいこととか望ましいことというのを追い求めていって、それに自分を合わせていこうとする

生徒から、もっと多様になっていて、例えば席を譲るといふときに、譲られる人の気持ちを考えると譲らないほうがいいのではないかというような、望ましきだけではない部分も考えていくところがある。そこが入り交じった子どもたちに向けてどういふ素材を出すのか。またそれをディスカッションしていくときに、望ましきに負けてしまうのではなく、いろいろなことがあつて、許容といふか、そういったものも全部含めて授業で扱うことになるので、できるだけ一方向の望ましきに行かないことも大切で、確かに高齢者に見えるけれども、でもその人は譲られたくないかもしれない、そんな意見も生徒から出てくるような素材であつてほしいと思う。だから、ニュートラルな素材であるといふ意味では、先ほどから言つてゐるタイトルにつながつていきやすいH者の思ひといふか、そちらに対してもう少しニュートラルなのはA者かもしれないと思つてゐる。大変難しい。でも、よくよく読めば、A者の中にもそういう思ひはあると思ふので、二者択一を最終的に決めるのであれば、私の中では多様なものを引き出せる素材といふところだろうか。

里 村 委 員 我々の仕事は、教科書を選ぶだけではないと思ふ。であるから、加藤委員の意見を少し膨らまして言つと、もしH者を選んだら、型式どおりの言葉に導くことに余り固執しないよう、いろいろなことに発展させるような授業展開をしてほしいと言わなければいけないし、もしA者を選ぶとすれば、ばらばらにならないようにある程度道筋をつけていくようにと、H者の時と逆のアドバイスをしなければいけない。つまり、どちらの教科書を選ぶかによつて、教育委員会として次にどういふ形で教科書を生かすためのアドバイスをしていくかといふ宿題が残つてゐる。

教 育 長 今までいただいた意見の中では、全体としてはH者のほうのご意見が多かつたかなと受け止めてゐるが、先ほど加藤委員、里村委員から出たように、教科書だけでなく、その後の指導の仕方、教え方、そういったところの取り組みもまた大事だと、フォローが必要だといふ意見をいただいた。それはそのとおりに進めていかなければいけないと思つてゐる。

H者といふご意見が多かつたかと思ふが、採択の候補としてH者といふ流れになつてゐるかと思ふが、そういった取り扱いで皆さん、いかがか。

(異議なし)

教 育 長 先ほど申し上げたように、留意点もあるので、そういった部分はきちんと教育委員会としてもフォローしていかなければいけないと思ふところである。

それでは、中学校道徳については、以上ご議論いただいた内容を採択理由として事務局に整理してもらい、今月27日に最終的に決定したいと思ふ。

この際、皆さんから何か意見等があれば頂戴したい。

加 藤 委 員 全体を拝見して、例えば死刑制度、それから臓器移植、尊厳死、裁判員裁判など、相当深刻な、大人にとつても答えの出ないものが扱われているといふことを思つた。そうなると、これは生徒の学びだけではなく、大人自身が自分の考え方とか生き方とかが問われるテーマになると思ふ。道徳を介して向き合うのは、教師だけではなく家庭も含まれると思ふので、大人が子どもたちに世の中の難しいテーマを与えていきながら自分も考え、同時に双方で学んでいく姿勢を持つてゐる必要があるといふことを強く思つたので、少し言葉をつけさせていただいた。

教 育 長 ほかに委員の皆さんから何か意見はないか。

里 村 委 員 私もそれについて思うところがある。例えば死刑制度を書いてある教科書があるが、ちょっと無理だと思った。つまり1年生から3年生の道徳の教科書の一部を使っているが、十分に伝わらない。尊厳死の問題もそうだと思う。つまり避けて通れない問題であるが、私たちも十分に考えるだけの力もないし、まして道徳の教科書に載せて先生にそれを託すというのは少し無理があるように思った。一方で、非常に大事なそれらの問題を道徳の教科書に入れなくていいのだろうかということになると思う。

加 藤 委 員 先ほどの発言は、世の中にある出来事として、私たちも同時に学んでいかなければいけないことなのではないかというところを強く言いたかったのが趣旨であった。

教 育 長 ほかに意見はないか。

(意見なし)

教 育 長 以上で平成31年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書「中学校 特別の教科 道徳」の採択についての協議を終了する。

4 閉 会 午後5時35分